

『日本アジア研究』第17号（2020年3月）

明和度朝鮮通信使と日本の文人たちとの 文化交流についての一考察

——製述官南玉，加賀藩の儒者中西尚賢，木村兼葭堂，
三人の交流を巡って——

仲 三枝子*

本論文は、明和度（1764）朝鮮通信使と日本の文人たちとの文化交流において、加賀藩の儒者中西尚賢の動向を追いながら、製述官南玉・中西尚賢・木村兼葭堂の三人の交流を巡って論考し、埋もれていた史実を明らかにするものである。これにより明和度使行の文化交流・加賀藩と明和度朝鮮通信使との文化交流の研究、および大坂の文人木村兼葭堂の人物交流の研究にも、ささやかながら資するものとする。主要史料となるのは、明和度朝鮮通信使製述官南玉『日観記』、そして加賀藩の2つの史料、富田景周編輯『燕臺風雅』と森田良郷編『泰雲公御年譜』である。この3つの史料の考察によって、明和度使行において、加賀藩の詩文唱和集は遺されることはなかったが、南玉・中西・兼葭堂の3人に接点があり交流があったことが判明した。3人がそれぞれに接した軌跡は、明和度使行が史上最も活気に満ち溢れた文化交流があったことを示すと同時に、悲惨な事件や事故に見舞われた、苦難に満ちた使行でもあったことを物語る。日朝間の交流のみならず、中西と兼葭堂の交流は通信使を巡って日本の文人同士の間においても、自由闊達な交流があったことを改めて伝えてくれるものである。そして『日観記』に記された南玉の、中西・兼葭堂らへの思いの言葉は、民際交流の原点をなすものであり、真の友好とはなにかを、現代に生きる我々にも示唆してくれるものである。

キーワード：南玉，中西尚賢，木村兼葭堂

はじめに

第一節 問題の所在

第二節 主要人物と主要史料についての概観

第一章 『泰雲公御年譜』による中西尚賢の動向の考察

第一節 加賀藩の朝鮮通信使迎接対応概観

第二節 『泰雲公御年譜』による中西尚賢の動向の考察

第二章 『燕臺風雅』による中西尚賢の動向の考察

第一節 『燕臺風雅』巻之六・中西尚賢の項

第二節 『燕臺風雅』巻之六・乾祐直の項

第三章 『日観記』による中西尚賢の動向の考察

第一節 『日観記』による中西尚賢の動向の考察

第二節 崔天宗殺人事件について

* なか・みえこ，埼玉大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程 日本アジア文化専攻

第三節 『日観記』による長谷川尚之の動向の考察
第四章 『日観記』による木村兼葭堂の動向の考察
むすび

はじめに

第一節 問題の所在

本論文は、明和度朝鮮通信使と日本の文人たちとの文化交流において、加賀藩の儒者中西尚賢の動向を追いながら、製述官南玉・中西尚賢・木村兼葭堂の三人の交流を巡って論考し、埋もれていた史実を明らかにするものである。

これにより明和度使行の文化交流・加賀藩と明和度朝鮮通信使との文化交流の研究について、および大坂の文人木村兼葭堂の人物交流の研究にも、ささやかながら資するものとする。主要史料となるのは、明和度朝鮮通信使製述官南玉『日観記』、そして加賀藩の2つの史料、富田景周編輯『燕臺風雅』と森田良郷編『泰雲公御年譜』である。

加賀藩の富田景周が編輯し著した『燕臺風雅』10冊20巻は、8巻が加賀藩の藩初以来文学発展の次第を論じ、学者文人の伝を挙げたもの、12巻が詩文を集めたものである。その『燕臺風雅』巻之六・乾祐直の項¹に、韓客南秋月と記されているところの、明和度朝鮮通信使製述官南玉が、乾の自家集『莊岳集』を称賛していることが記載されていた。第11次となる明和度使行は、朝鮮通信使史上民際交流が最も盛行であったといわれ、詩文唱和集は54冊、使行録は10冊遺されており、ともに史上最多となっている²。しかし、明和度において、加賀藩の詩文唱和集は遺されていない（資料1）。

華やかな国際文化交流が挙行されたはずの明和度において、雄藩加賀藩の詩文唱和集は、なぜ遺されていないのだろうと疑問を抱いた筆者は、『燕臺風雅』巻之六・乾祐直の項から、加賀藩の儒者と通信使南玉との間でなんらかの関わりがあったのではないかと推察した。そして前記の3つの主要史料を時系列に追いながら、明和度加賀藩の詩文唱和集が遺されていない理由を探究、考察した。その結果、明和度使行において、加賀藩の詩文唱和集は遺されることはなかったが、製述官南玉・加賀藩の儒者中西尚賢・そして大坂の文人木村兼葭堂の三人に接点があり、交流があったことが判明した。さらに大坂で、兼葭堂が南玉と中西の仲介役として労をとったことも明らかとなった。

上記の考察から関連する先行研究をみると、主要史料のひとつとなる『日観記』と南玉についての研究は、日本においては始まったばかりとなる。杉村邦彦「多胡碑の朝鮮への流伝に関する新資料」（2008）、鄭英實「朝鮮後期知識人と新井白石像の形成——使行録を中心に」（2011）、金文京「『萍遇録』と「兼葭堂雅集圖」——十八世紀末日朝交流の一側面」（2012）、鄭敬珍「一七六四年の朝鮮通信使からみる庶孽文人——「兼葭雅集圖」制作の過程と大坂文人

¹ 富田景周編輯『燕台風雅』巻之六、勸文堂、1915年、14、15頁。

² 上田正昭『朝鮮通信使 善隣と友好のみより』明石書店、1995年、30-35頁；李元植『朝鮮通信使の研究』思想閣出版、1997年、648-665頁；仲尾宏『朝鮮通信使と壬辰倭乱——日朝関係史論』明石書店、2000年、300、301頁。

たちとの交遊」(2016) などがあるが、南玉と加賀藩との関りについての研究はまだない。

加賀藩と朝鮮通信使に関する先行研究は少なく、日本統治時代に遡らざるを得ない。嚆矢は、松田甲『續日鮮史話』(第2編)「正徳期朝鮮通信使と加賀の學者」(1931) となり、松田以後、2000 年以降によく加賀藩と通信使に関する研究はあらわれる。徳田寿秋「朝鮮使節と御用馬調達と行列について」

(2005)、小西洋子「別宗祖縁と前田綱紀」(2007)、横山恭子「朝鮮通信使迎送体制の研究」(2015) 等の論考がある。しかし、加賀藩と朝鮮通信使との文化交流についての研究は、殆どなされていないといっても過言ではない。松田の正徳度の文化交流についての研究後、加賀藩と朝鮮通信使との文化交流についての論稿としては、仲三枝子「明和度朝鮮通信使が果たした文化交流についての一考察」(2015) のみとなり、究明しなければならない研究課題が多く残されているのが現状である。

一方、知の巨人と称される木村兼葭堂については、多くの優れた研究がなされている。文学・美術・博物学・本草学など博学多識の町人学者としての人物像、階層を問わず日本全国各地から彼の許に訪れた人物たちとの交流など、様々な角度から、研究が進められている。特に兼葭堂と交流があった人物についての研究は、兼葭堂の日記簿より、水田紀久・野口隆・有坂道子編著『完本兼葭堂日記』(2009) に集大成された。しかし、『完本 兼葭堂日記』は、1779 (安永8) 年1月から1802 (享和2) 年1月までのもので、原史料がみつからないために、解明されていない空白の部分も多い。1764 (明和元) 年に出会った、南玉と中西と兼葭堂3人の交流は、明和度朝鮮通信使と兼葭堂の文化交流の研究においても未見である。

発掘した南玉・中西・兼葭堂3人の交わる足跡を線で結ぶと、明和度使行が、史上最も活気に満ち溢れた文化交流があったことを示すと同時に、悲惨な事件、事故に見舞われた、苦難に満ちた使行でもあった³ことを、物語る軌跡となっている。そして、日朝間の交流のみならず、中西や兼葭堂の2人の動向は、通信使を巡って、日本の文人同士の間においても、活発な交流があったことを、改めて教えてくれるものである。さらに『日観記』に記された、南玉が中西と兼葭堂らに語った言葉は、民際交流の原点をなすものであり、時代を超えた現代の我々にも、真の友好とはなにかを示唆するものである。

第二節 主要人物と主要史料についての概観

まず主要人物の南玉・中西尚賢・木村兼葭堂、そして主要史料となる『日観記』・『燕臺風雅』・『泰雲公御年譜』について概観する。

(一) 主要人物について

① 明和度朝鮮通信使製述官南玉

【南玉 (1722~1770)】^{ナモグ} 本貫は宜寧で、字は時韞、号は秋月である。祖父は南哲、父は南道赫で、ともに進士を務めた。南玉は庶系のため、文才に秀でていたが、生活は貧しく苦しかった。25歳の時(1746)に、科挙を受ける士大夫の子孫を相手に売文をした罪で、流刑された。翌年赦免されるが、都市で農業

³ 李前掲(脚注2)、326, 327 頁。

や商業に従事できない庶孽⁴にとっては、売文は生きるための生計手段でもあった⁵。1753（英祖 29）年、32 歳の時、庭試文科に丙科 4 等で合格した。そして 1763（英祖 39）年癸未使行（明和度使行）の製述官⁶として任命され日本に来聘し、文才の名を馳せた。帰国後、1765（英祖 41）年、従 6 品の遂安の郡守に任命されたが、1770（英祖 46）年崔益南の獄事の時、延享度使行に書記として参与した李鳳煥と親しくしていた廉で投獄され、その 5 日後に獄死した。享年 48 であった。使行録『日観記』をはじめ、紀行詩集『日観詩草』、唱酬詩集『日観唱酬』など、膨大な使行詩文を遺している⁷。

優れた才能を持ちながらも庶孽文人であった南玉は、42 歳の時に製述官として参与するようになった日本への通信使行は、未来に希望を見出せなかった南玉にとって、天が与えたまさに好機であった。製述官の任務が重労働で、心身ともに疲労困憊しても、この 2 年間の使行期間こそは、彼の人生で、最も自信に満ち溢れた幸福な時節であったといえよう。そしてその使行の体験を記録した使行録『日観記』は、彼の生涯において光輝く生きた証となった⁸。

② 加賀藩の儒者中西尚賢

【中西尚賢（？～1768）】
ナカニシナオカタ
本姓中原氏。諱は尚賢、通称市之進。字は士希、鯤溟又は水竹居と号した。天性放縦にして酒を好み、赤貧洗うが如くであった。書素を購うことが出来ず、市に行き書賣の店頭で之を讀んだ。長じて藻思蔚發、筆を把れば一気に七律十余篇を呵成した。初め前田直躬⁹の儒臣となり、後村井長穹（又兵衛）に仕えた¹⁰。

『燕臺風雅』卷之六・中西尚賢の項¹¹には、「……略 嘗當_ニ舞勺時_ニ、父學_ニ方技_ニ、尚賢憎_ニ老_ニ死醫卜之群_ニ、自絶_レ意不_レ學、雖_レ股讀_ニ典籍_ニ、然赤貧曩無二盛煙一書素不_レ得_レ購、生平閱_レ市、倣_ニ王充之勤_ニ、……略」

⁴ 鄭敬珍「一七六四年の朝鮮通信使からみる庶孽文人——「兼葭雅集図」制作の過程と大坂文人たちとの交遊」『日本研究』No.52, 2016 年, 153-164 頁。

⁵ 同, 160 頁。

⁶ 製述官は文字をもって著述する仕事を任務とした。通信使一行の文書に関する事務の官長としてだけではなく、日本の文士たち、並びに一般人たちとの筆談唱和を主導する役割もあった。17 世紀以降、通信使の役割が政治的・外交的なものから次第に文化交流へとその重点が移っていったことから、製述官、並びに書記の役割は重要さを増していった。特に癸未使行（明和度使行）では、日本側の詩文要求が他次の時より激しさを極めたので、艱難する旅程が一層辛くなるばかりであったという（남옥지음, 이혜순감수, 김보경 옮김『붓끝으로 부사산 바람을가르다』소명출판 2006 [南玉著, 이혜순監修, 김보경翻譯『筆の穂で富士山の風を分つ』소명出版 2006]), 4 頁。

⁷ 同, 7-9 頁。

⁸ 同, 13 頁。

⁹ 加賀藩には「殿様九人」という言葉があり、藩主前田氏と、八家と称された重臣で年寄の本多氏・長氏・横山氏・前田氏（直之系）・前田氏（長種系）・奥村氏（本家）・奥村氏（分家）・村井氏を合わせて九人と言った。前田直躬（直之系）は 1 万 1000 石、村井又兵衛は 1 万 6569 石であった。石川県姓氏歴史人物大辞典編纂委員会編『石川県姓氏歴史人物大辞典』角川書店, 1998 年, 46, 534-538 頁。

¹⁰ 日置謙『改訂増補 加能郷土寺辞彙』北國新聞社, 1983 年, 649 頁。

¹¹ 富田前掲（脚注 1）卷之六, 15, 16 頁。

十三歳になって、父から医術・神仙術等を学んだが、尚賢は老死醫卜の集団を嫌い、自ら志を断ち学ばなかった。そして股を錐で刺し、典籍を読んだ。赤貧で書素を購うことができなかったのも、いつも市に行き、王充に倣って、店頭で之を読んだ。とある。

また文末に、「……略 金龍道人曰、士希介_{銀閣宏公}、訪_{余城南雨新庵}、余一目撃、以爲有道之人也、既而與語、果博物修士也、且偉軀幹、美髭鬚、而温厚之風可_掬焉」

金龍道人¹²は、尚賢は銀閣宏公を頼り私の雨新庵を訪ねてきた。私は一目で彼が有道の人物であることを見抜いた。語り始めれば、加えて広く物事を修めた人であった。身体は大きく立派で鬚は美しく、温厚な人柄に満ちていると云う、と記されている。

大河良一『加能俳諧史』(1974)に、中西が俳人の鯉溟仲尚として、1751(宝暦2)年、菅家八百五十年祭北野社奉納の梅花百詠編纂者の一人として名を連ねている。明和元年長崎に赴いた帰途、木村巽斎を訪ねたこともあり、1766(明和3)年には暮柳発句集¹³に序文を草したとの記述もあり¹⁴、俳人としても活躍していたことがうかがえる。

中西尚賢の生年は不詳なので、亡くなった時の年齢は不明であるが、明和度朝鮮通信使来聘の4年後に歿している。

③ 木村兼葭堂

キムラケンカドウ
【木村兼葭堂 1736(元文元)年～1802(享和2)年】 大坂北堀江に生を受け、名は孔恭、字は世肅、巽斎また遜斎と称した。木村氏。代々酒造業を営む豪商として、坪井屋吉右衛門を名乗った。本草学を津島桂庵・小野蘭山に、絵を僧鶴亭・池大雅らに、篆刻を高芙蓉に、詩文を片山北海に学んで、詩社混沌社の活動に加わった。庭中の井戸より出た葦根を名物浪華の葦と喜び、室を兼葭堂と付けた。浪華をよぎる客は雅俗となくこの堂を訪れ、千客万来の日々であった。まれにみる多藝で、その徹底した中華趣味は、中国より渡来の黄檗僧大成禅師も一目置いたほどであったという。兼葭堂が、百費を省き百方手を尽くして集めた珍籍、書画、地図、標本類は棟に充ち、コレクトマニア兼葭堂の名は、早くから来舶人たちを通じ、中国や朝鮮にも知られていた¹⁵。

1758(宝暦8)年頃より、詩文結社兼葭堂会を結び、宝暦末、明和初年頃まで催した。兼葭堂とともに明和度朝鮮通信使と交流し、「兼葭堂雅集圖」の序文を書き、またその制作過程や後述する崔天宗被殺事件の推移を綴った『萍遇

¹² 金龍道人：釋金龍(金龍敬雄)：(キンリュウ ケイユウ 1712(正徳2)年～1782(天明2)年)。江戸時代中期の僧、漢詩人。天台宗。1743(寛保3)年武蔵足立郡吉祥寺(埼玉県)の住職。15年後、京都にうつり、1763(宝暦13)年江村北海と賜杖堂詩社を結成した。晩年は郷里美濃に隠棲。享年71。俗性は高橋という。字は韶鳳。号は金龍道人、道楽庵、雨新庵など。著書に『雨新庵詩集』『道楽庵夜話』等。

(<https://kotobank.jp> デジタル版日本人辞典+Plusの解説 金龍敬雄の項)

¹³ 暮柳発句集：2冊。金沢の俳人後川編。京橋屋治兵衛板。後川がその父暮柳舍希因の句を集めたもので、門人倚之・如本同校としてある。序は明和三禩丙戌之夏六月水竹主人仲(中西)尚賢。(日置前掲(脚注10))、806頁。

¹⁴ 大河良一『加能俳諧史』清文堂出版、1974年、261, 262頁。

¹⁵ 水田紀久『水の中央に在り 木村兼葭堂研究』岩波書店、2002年、16, 17頁。

録』を著した大典¹⁶は、この兼葭堂会の一員であった¹⁷。

明和度使行において兼葭堂は、福原承明（尚脩）¹⁸とともに、信使一行中の15名に対して、その姓名字号等を篆刻し、印箋に相当する『東華名公印譜』を添えて、手土産に贈っている¹⁹。

また諸文士が集う様子を描いた「兼葭堂雅集圖」を、通信使一行が帰路の大坂をいよいよ出発する前日に完成させて、朝鮮文人に手渡した。両国の文人同士の共感のもと、制作されたという「兼葭堂雅集圖」は、現在韓国國立中央博物館所蔵となっている²⁰。

（二） 主要史料について

① 南玉『日観記』

【『日観記』】 『日観記』は、旅程に従って日記体で記録しており、また項目別に仔細に内容を叙述した使行録である。春・夏・秋・冬の総4冊、672面で成っている。「春」には凡例を、「夏」・「秋」と「冬」の前半には日記を、「冬」の後半には総記を置き、安定した全体構成となっている。『日観記』は題目通りに「日本を観察した記録」である。日本を客観的な立場で観察しながら体系的な構成を備え、膨大な内容を緻密に記録している。

南玉は文化交流の第一線で服務する製述官として、人一倍強い使命感と自負心を持っていた。そして彼は、日本に対して客観的に現実を直視することに力を注いだ。日本の文学に対しても、比較的公正に評価しようと努力をしていた点が多く見られる。その視覚、叙述ともに、平衡バランスがとれていることも、重要な特徴である。全体の構成が安定的であり、日にち別の日記の内容もバランス感ある叙述がされている。内容の膨大さと記録の緻密性は、他にあまり類を見ない。日本人だけではなく、自国の随行員500名に対する情報も洩れなく記録して、行程や日給についても非常に仔細、かつ具体的に記録している。また「総記」を通して、癸未使行から朝日交流の問題点を指摘し、進んだ解決策

¹⁶ 大典（ダイテン）：（1719（享保4）年～1801（享和元）年）蕉中禪師、徳川中期の禪僧。諱は顯常、字は大典。蕉中、梅莊と号する。8歳の時京都に出て黄檗宗華藏院に入ったが、既に相国寺独峯に従って剃度し、宗乗の講究にいそしむと共に宇野士新・大潮に就いて詩文を練った。28歳の時、独峯の後を継いで慈雲庵に住持し、1779（安永8）年61歳にて相国寺を董し、1785（天明5）年、南禅寺の住職をつぐ。1778（安永7）年選ばれて朝鮮修文職に就任し、国交の文書を管掌したが、1787（天明7）年朝鮮聘使の来朝しようとしたとき国内凶歉のため、幕府が延長を欲して、大典に信書案を囑すると、能文をもってこれを計らい、1791（寛政3）年、松平定信より功を賞せられた。1801（享和元）年歿す。享年83。著書は『小雲楼稿』『皇朝事苑』『萍遇録』『北禅詩草』『小雲詠物詩』『論語鈔説』『詩書鈔説』『四書越俎昨非集』（李前掲（脚注2）、374頁）。

¹⁷ 鄭前掲（脚注4）170, 171頁。

¹⁸ 福尚脩：福原尚脩，名は尚脩，字は承明，浪華の医師福原百鍊の男。承明尤も詩文に長じ、兼て書画篆刻並びに声楽等の諸技に通ずる。朝鮮聘使成龍淵嘗てこれと相見え大いに歆び呼ぶに水雲居士の号をもってする。1768（明和5）年歿。享年34。（『大阪人物誌』・李前掲（脚注2）、376頁）。

¹⁹ 李前掲（脚注2）、361頁。

²⁰ 鄭前掲（脚注4）、174, 175頁。

も提示しており、南玉の「時代に先立つ意識」を窺うことができる²¹。

本稿はこの『日観記』から、加賀藩の儒者中西尚賢と中西の弟子である長谷川尚之²² 2 名の名前を発見した。

② 富田景周編輯『燕臺風雅』

【エンタイフウガ『燕臺風雅』】 富田景周が、加賀藩の藩初から寛政に至るまでの学風及び学者文人の伝と、漢詩文の佳作を集めたものである。10 冊 20 巻。1 巻から 8 巻は、藩初以来文学発展の次第を論じて学者文人の伝を挙げ、9 巻から 20 巻までは、詩文を集めている。原撰は 1791（寛政 3）年に終わったが、後に追記を加え、1825（文政 8）年之を藩侯に献じた²³。著者の富田景周（1745（延享 2）年～1828（文政元）年）は、加賀藩士で郷土史家。父は主税良鄰。1745（延享 2）年に生まれ、1762（宝暦 12）年宗家富田修和の養子となり、1803（享和 3）年出銀奉行となる。1818（文政元）年 500 石を受けて致仕し、1828（文政 11）年 83 歳で歿した。字を大賚、号を癡竜・痴竜・韜照・櫻寧齋・樂地堂・方竹庵・暮松楼と言ひ、経学詩賦を『莊岳集』の著者乾祐直に師事した。博覧強記にして国史に精通し、兼ねて加賀藩の地理歴史を研鑽し、『燕臺風雅』20 巻、『越登賀三州志』45 巻を編んだ。このほか、猶教訓や考証に関する著書も数多く、それぞれが幾巻にもわたる大部となっており、その目録数だけでも 50 余に及んでいる²⁴。

③ 森田良郷編『泰雲公御年譜』

【タイウンコウゴネンブ『泰雲公御年譜』モリタヨシサト】 森田良郷編自筆で、1852（嘉永 5）年に編纂された。泰雲公とは、加賀藩第十代藩主前田重教（1741（寛保元）年～1786（天明 6）年）のことである。内容は重教の誕生から 1754（宝暦 4）年継嗣までを略記し、爾後 1771（明和 8）年養老までの領内の諸事件を詳述している。巻 1 から巻 8 までであるが、巻 1、巻 2 の筆者は良郷ではない²⁵。森田良郷（1790（寛政 2）年～1857（安政 4）年）は、通称大作、初諱常通、翠園と号した。茨木氏の臣山

²¹ 남옥지음, 이해순감수, 김보경 옮김前掲（脚注 6）, 9, 13 頁。

²² 長谷川尚之（ハセガワ ナオユキ）：（1734（享保 19）年～1812（文化 9）年）また、尚と言う。一諱は元常。通称友輔・準也・準左衛門。字は子華。北固又は鷄助と号した。父は加賀藩の歩士与右衛門雅智。1734（享保 19）年に生まれ、学を中西鯤溟（尚賢）に受け、40 余歳で老臣村井長穹（又兵衛）の教授となり、1781（天明元）年、召されて藩の儒者となり、5 年新知 100 石を賜ひ、1792（寛政 4）年明倫堂の助教に任じ、5 年都講に進み、1802（享和 2）年に辞した。1812（文化 9）年 79 歳で歿した（日置前掲（脚注 10）, 717 頁）。この長谷川尚之の曾孫、長谷川準也は、金沢市の二代市長である（石川県姓氏歴史人物大辞典編纂委員会編著『石川県姓氏歴史人物大辞典』角川書店、1998 年、141 頁）。長谷川準也が書いた『先祖由緒并一類附帳』（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）には、曾祖父長谷川準左衛門（尚之）から始まり、祖父長谷川源右衛門（猷）、父長谷川与一の経歴が記載されているが、曾祖父の長谷川準左衛門（尚之）が、明和度朝鮮通信使と接触があったという記述はない。

²³ 日置前掲（脚注 10）, 104 頁。

²⁴ 同、632 頁。

²⁵ 同、516 頁。

川長右衛門惟明の五男であった。1801（享和元）年 12 歳の時に、主家茨木氏の御手廻役となり、1804（文化元）年、森田修陳の養子となった。1830（天保元）年、父の後を襲ぎ禄 60 石を受け、1840（天保 11）年家老役となった。篤実で、文武諸芸に励み、俳諧には互扇の号を用いた。著書に『泰雲公御年譜』8 卷・『続咄随筆』3 卷・『続漸得雜記』38 卷他がある。享年 68。息子の森田平次は、終生営々として藩史の研究に没頭し、著述の多さは富田景周を凌駕し、研究の範囲と方法とにおいても一段と進歩を見、後の学者たちは皆その余慶を受けたという²⁶。

第一章 『泰雲公御年譜』による中西尚賢の動向の考察

第一節 加賀藩の朝鮮通信使迎接待応概観

近世最大の藩であった加賀藩は、江戸幕府の権勢を内外に誇示し、国際文化交流の最大の華でもあった朝鮮通信使来聘に、幕府や諸藩とともに総力を挙げて迎接待応した。加賀藩の幕命は、乗馬役であった。明和度においての加賀金沢藩は、淀から新居の参向に、鞍置馬 50 疋を負担した。これは、約 2 万石に付 1 疋の割合の負担数となっており、次に負担数が多い陸奥仙台藩の 30 疋を見ると、加賀金沢藩は抜きん出た負担を請け負っている²⁷。5 代藩主綱紀の采配などを見ると、加賀藩は幕命を遵守するとともに、外交の晴舞台で大藩としての体面を保つために、万全の体制で鞍置馬派遣に臨んだ姿勢がうかがえる²⁸。

通信使との文化交流の面ではどのように対応したのであろうか。江戸時代 12 回に亘り来聘した通信使に、会見した多くの日本の學者のなかで、最も朝鮮に名を博したのは、幕府の文教を統監した林羅山と林整宇、そして加賀藩出身の幕府儒臣木下順庵であった。順庵は、藤原惺窩から学んだ加賀藩の碩儒松永尺五に師事し、加賀侯綱紀に招聘され 19 年間仕えた後、幕府の学識に就いた。順庵の門からは、江戸期に大きな事績を遺した新井白石・室鳩巢・雨森芳洲・祇園南海・榊原篁洲の錚々たる木門五先生をはじめ、綺羅星の如く、偉才を輩出した。偉才たちは、朝鮮の国情に精通する者、隣交制度の改修に力を注いだ者もあり、信使たちとは経史の談論、詩文の贈答等を成し、朝鮮側に深い畏敬の念を抱かせしめた²⁹。

朝鮮外交や交流に深く関与した偉才たちを、数多く生んだ木下順庵であったが、この順庵の才を見出し、送り出した加賀藩が、各次の通信使との詩文応酬での文化交流にも、伝統的に藩主をはじめ儒者や文人も、藩の威信をかけて臨んだであろうことは明らかである。天和度、正徳度、文化度においては、順庵や加賀藩の儒者、順庵ゆかり、加賀藩ゆかりの儒者達が優れた詩文唱和集を遺している³⁰。明和度使行は前述したとおり、史上最多の詩文唱和集が遺されていて、活気溢れる文化交流が行われている。そのような雰囲気の中、なぜ学問・芸術文化を重んじる加賀藩が、詩文唱和集を遺していないのであろうか。

²⁶ 同、905、906 頁；石川県『石川縣史 第参編』石川県図書協会、1974 年、352 頁。

²⁷ 横山恭子「近世中期朝鮮通信使の乗馬調達」『朝鮮学報』第 213 輯、2009 年、62-65 頁。

²⁸ 同「朝鮮通信使迎送体制の研究」（慶應義塾大学博士論文、2015 年）、156 頁。

²⁹ 松田甲『日鮮史話 第五編』朝鮮総督府、1929 年、64-67 頁。

³⁰ 李前掲（脚注 2）、187-196、237-307、424-429 頁。

以下、その理由を検証、考察する。

第二節 『泰雲公御年譜』による中西尚賢の動向の考察

『泰雲公御年譜』に、朝鮮通信使に関する次のような記述があった。

①（宝暦十三年十二月三十一日条 筆者注）

一、同晦日自京都飛脚到來。大坂より當十三日杉浦等三人歸京。韓使も當月中旬大坂着津の様相聞候得共、筑前藍嶋へ當月三日夜着船候使有之候以後、副使之舟少々破損有之、此間修補。其上大坂に而越年は彼是指支之趣候故、態与海路にて越年の圖りを以、大坂着來春に至り可申与の沙汰に候。諸侯方御馳走之所々人馬等、先達而被指出置候衆中過分之失脚之由。畢竟諸國共に聞番之未熟にて可有候。當廿一日、朝鮮人献上之御馬五疋并着添候韓人三人大坂へ参着。三使之船は來正月下旬にも可相成旨申來る。

②（宝暦十四年一月二十二日条 筆者注）

一、朝鮮人去年霜月より今日來る明日くと申沙汰計に而、當年に到り候てもいまだ不參候に付、京童部の狂歌。

唐人は淀の川瀬の水車けふもくるくるあすも来る来る

③（宝暦十四年二月朔日条 筆者注）

一、村井又兵衛殿儒者中西市進、去年霜月朝鮮人來聘に付、贈答之望に而大坂江罷越居申由に候得共、來着延引、其上旅費も乏敷相成、待付不申、去春罷歸候由。

朝鮮使節を迎えるに当り、遠方より逐一使節の動静が、遅れながらも国元金澤へも報告され、対応する加賀藩の緊張の感が伝わってくる。

①は、京都からの飛脚が、杉浦等の3人の藩士（乗馬役の任務を藩より拝命した³¹⁾）は、12月13日に大坂から帰京した。信使一行は宝暦13年12月中旬に、

³¹【政隣記】正月二十八日（宝暦13年一筆者注）、今年朝鮮人來聘に付、山洲淀より荒井まで之御用御先弓頭杉浦仁右衛門・御先筒頭矢部權佐は二月二十七日被仰渡。御大小將横目長瀬次郎兵衛・割場奉行宮崎彌左衛門被仰付。【政隣記】八月三日（宝暦13年一筆者注）、前記正月二十八日記之朝鮮人御用請負に相成、其上御勝手御難澁に付、被遣候御人御減少、御横目等不及罷越に段、今日御用番奥村主水殿夫々被仰渡。右御用罷越候御先手杉浦仁右衛門・矢部權佐江、今月十一日於御次小判百五十兩宛、割場奉行宮崎彌左衛門江七十兩、御歩横目江二十五兩宛拜領被仰付、九月六日於御表向仁右衛門・權佐江生絹三疋、彌左衛門江同二疋拜領被仰付、如御先例於御居間書院被爲召、御意有之。侯爵前田家編輯部『加賀藩史料 第八編 自寶暦八年至安永參年』1935年。

上記の記録により、杉浦等の3人の藩士とは、弓頭杉浦仁右衛門・先筒頭矢部權佐・割場奉行宮崎彌左衛門である。『政隣記』（セイリンキ）：津田政隣の編著。加賀藩の史実を年月に係けて記録したものである。原本31冊、蠅頭の細字を以て書かれている。その内第1冊から第11冊までは、1538（天文7）年から1778（安永7）年までの記事で、巻頭に源政本の序があり、内題に記録とあるのは政隣記録を略したものと思われる。第12冊から第31冊までは、1779（安永8）年から1814（文化11）年8月までの記事で、内題を耳目甄録とし、その第12冊には『是迄題目政隣記録之処改レ之。』とし、又安永8年蕨朔源政隣の序がある。以上合わせて外題はいずれも『政隣記』であ

来坂する予定であったが、藍島に到着後副使船が破損し修理、抛って海路にて越年、大坂到着は来春になる。この大幅なスケジュールの遅れで、諸藩の迎接体制に大きな影響が出ている、こと等の知らせを運んだ。

③の下線を引いた箇所が、本論文の主人公となる中西尚賢の最初の足跡である。加賀藩年寄村井又兵衛の儒者中西市進が、昨年の 11 月に信使への贈答の望み³²で、大坂に行き待っていたけれども、一行の来着が延引して、旅費も乏しくなってしまった為に、正月に金澤へ帰ってきてしまったとことが書かれている。

この中西市進すなわち中西尚賢のその後の動向が、富田景周編輯『燕臺風雅』に記されていた。

第二章 富田景周編輯『燕臺風雅』による中西尚賢の動向の考察

第一節 『燕臺風雅』巻之六・中西尚賢の項

『燕臺風雅』中西尚賢の項に、次のような記述があった。

①「……略……，明和甲申，聴_レ韓人来聘_一，蓬髻檻樓，千里獨歩之_一崎畧_一，寄_一韓客_一七言古體之詩，暨筆談等，造語之敏工，非_一轍線材容易可_一企競_一，」（明和元年韓人が来聘したと聴き、もじゃもじゃの髻にぼろぼろの衣服を纏い、千里の道を独り歩いて長崎へ行った。韓客と七言の古体詩をもって筆談等に及んだ。造語を敏く作って競い合ったが、才能が乏しく容易ではなかった）旨が書かれている。

中西が辿り着いた崎畧（長崎）は、通信使一行のルートには入っていない。一行は、対馬から壹岐を通り、藍島、下関、鞆津へと経て行くのであって、長崎はルート上から遠く離れている。一心不乱に歩き続けて中西が遇ったという韓客は、朝鮮通信使ではない。中西がなぜ長崎へ行ったかの理由は不明である。

しかし、生涯にもう二度と会うことができないであろう朝鮮通信使に会うために、なりふり構わず一心に独歩で歩き続ける中西の、隣国の文化への憧憬の想いが、痛い程ひしひしと伝わってくる。

②「歸路經_一浪華_一，時以_一兼葭堂主有_一汲古癖_一，尚賢歎_レ門投_レ刺，然堂主未_レ詳_一尚賢何者_一，耳目屬_レ牆，鑽_レ隙窺_レ之，則蓬髻檻樓，非_一儼然儒相_一，故速不_一禮遇_一，尚賢立多時，忽賦_一詩_一，挑_一動之_一，於_レ是，倒_レ屣敬迎而延_一堂上_一，下_レ酒語三日，如_一舊相識_一，歸期贈以_一文房二三清品_一，南郭數詩，徂徠評之，各肉書一卷，是其一也，今余暮松樓藏_レ之，自_レ是聲價顯著，倍_一從前_一云，」

中西は、長崎からの帰路大坂を経た時、兼葭堂が明の汲古閣のように多くの

る。金沢市立玉川図書館近世史料館蔵（日置前掲（脚注 10），486, 487 頁）。著者津田政隣（ツダ マサチカ）： 初諱正隣。通称雄平・左近右衛門。父は正昌。明和中世祿 700 石を襲ぎ，大小将組に列し，天明以後前田治脩及び齊広に仕えて大小将番頭・歩頭・町奉行・大小将頭を経て馬廻頭に進み，宗門奉行を兼ね，職秩 200 石を受け，1813（文化 10）年致仕。翌年歿した。享年 59（日置前掲（脚注 10），584 頁）。

³² 贈答の望： 明和度朝鮮通信使との詩文唱酬時の贈答品として，乾祐直『莊岳集』を献呈しようとしたのではないかと考えられる。

蔵書と書物を著しているのですその門を訪ね、名刺を投げ入れた。兼葭堂は、尚賢が何者かわからなかったもので、屏に耳目を近づけ、隙間に錐で穴を開けて中西の様子を窺うと、ぼうぼうの鬢に衣服はぼろぼろであった。厳かな儒者の相ではなかったもので、すぐには礼遇をしなかったため、尚賢は長い時間立ち尽くしていた。中西がにわかに一詩を賦し、動きをしかけると、是によって兼葭堂はあわてて出迎え、家に招き入れた。初対面ながら旧知の間柄のように、3日間酒を酌み交わしながら語り合った。……略……是によって、(加賀における筆者注)中西の名声と評価は著しく以前より倍になったと云う。ということが書かれている。

中西と兼葭堂との間で、詩文を通して信頼関係が結ばれ、文人通しの交流があったことが記されている。また、加賀の地でも、兼葭堂の声望は知れ渡っていたことが窺える。

第二節 『燕臺風雅』巻之六・乾祐直の項

序章で述べたように、『燕臺風雅』乾祐直の項に、次のような記述があった。

「韓客南秋月(製述官南玉の号 筆者注)題_レ莊岳集_レ曰、其古體頗得_レ魏晉法_レ、其律絶清婉、五律七絶尤佳、余東來所_レ遇詩人、殆累累數、如_レ此人、竟未_レ易_レ得_レ之、景周_レ以爲秋月之_レ言、過賞失_レ實、」

乾祐直³³は『燕臺風雅』編著者富田景周の師でもあった。『莊岳集』は乾祐直の自家集である。富田景周は、秋月が『莊岳集』を絶賛していることについて、褒め過ぎであると述べているのであるが、これは、秋月(南玉)の手に『莊岳集』が確かに渡って、秋月が読んでおり、加賀藩の儒者に感想を述べていることを意味している。南玉に、この『莊岳集』を、いつ・どこで・誰が・どのようにして、手渡したのであろうか。秋月(南玉)が著したもののなかに、記録が残されているのではないかと考え、次に明和度朝鮮通信使製述官南玉の使行録『日観記』を手掛かりとして、検証し、考察した。

第三章 『日観記』による中西尚賢の動向の考察

第一節 『日観記』による中西尚賢の動向の考察

①『日観記』「春」巻四の巻末に、「唱酬諸人只筆語者亦附」(詩文唱酬を行った者と只筆語のみ行った者も付け加えた)として、各藩の儒者名一覧が記載されている。最後の方に加州人として、「仲尚賢」,「長川尚之」の2名の記述があった。正しくは「中西尚賢」,「長谷川尚之」であるが、2人は確かに加賀藩の儒者で、長谷川は中西の弟子であり、師弟の間柄であった。

②『日観記』「冬」巻九 四月初九日の項に、次のような記載があった。

「初九日 庚寅 留大坂城 ……略 周宏、木世肅、合離、有書致 加賀

³³ 乾祐直(イヌイ スケナオ): 通称新四郎、字は子健。莊岳又は山水堂と号する。金沢の人。土橋辰真・伊藤由言に学び、1732(享保17)年、加賀藩の老臣横山隆達の学士となった。1771(明和8)年歿、享年70余。著書、莊岳楚語2巻・莊岳集がある(日置前掲(脚注10)、57頁)。

州仲尚賢，備中州僧德雲，詩以為千里來，待乞得一言之和 世肅亦有詩，並引義不和 ……略」

（「四月九日 ……略 周宏，木世肅，合離に手紙を書いて出し，加賀州の仲尚賢と備中州の僧德雲が詩を以て千里も外から来て，一言詩歌に応酬を乞うて待っていた。世肅も同様に詩があった。すべて義理を理由に応酬してあげることができなかった。略……」）（筆者注 義理：崔天宗被殺事件に関わることで後述する）

③『日観記』「冬」卷九 四月十五日の項に，次のような記載があった。

「十五日丙申 ……略 雖當事故隔阻之時，無一字相報而去，殊非水陸數千里伴行，酬唱之意，良可駿也 荅合離，木世肅，仲尚賢，源文虎，書簡 魯堂要一來談穩」

（「四月十五日 ……略（下線部のみ） 合離，木世肅，仲尚賢，源文虎の書簡に返事を送る。……略」）

以上の三つの記述から下記のように考察した。

中西尚賢は崎畧（長崎）へ行った後，大坂へ立ち寄り兼葭堂宅を訪ねた。中西のその後の動向は，『日観記』の上記①，②，③の3箇所記述から，製述官南玉と中西に，なんらかの接触があったことが判明した。通信使の帰路大坂で，中西の詩は南玉の手に渡り，読んでもらうことはできたのである。しかし，崔天宗被殺事件が起こった2日後であったがために，通信使たちは，崔天宗への弔意と日本側への抗議により，詩文応酬をすることを放棄した。中西は，またしても不運なことに，南玉から詩文応酬をしてもらうことができなかったのであった。

第二節 崔天宗殺人事件について

中西たちは，崔天宗被殺事件の惨事の直後に，事件の影響をうけていたことが南玉『日観記』から判明した。崔天宗被殺事件とは，波瀾に富んだ通信使史上でも，最も凄惨な事件として知られる。

明和度朝鮮通信使が江戸城での儀礼を終えた帰路，1764（宝暦14）年4月7日未明に，大坂の宿所西本願寺津村別院（北御堂）で，都訓導崔天宗が対馬藩通詞鈴木傳蔵に殺害された。この事件にとりあえずの決着がつけられるまで，ほぼ1ヶ月の間，信使たちは大坂に留まった。信使一行は，5月8日に出船し，ようやく帰国の途につくこととなる³⁴。

この事件をめぐる日本側・朝鮮側双方の言い分には，大きな隔たりがある。その背景には両国それぞれに，自国優越意識が存在したことが指摘でき，それは両者の相互不信感につながるものでもあった³⁵。

南玉は『日観記』で，殺害事件が起こった日のことを次のように記している。
『日観記』「冬」卷九 四月初七日

³⁴ 池内敏『「唐人殺し」の世界——近世民衆の朝鮮認識』臨川書店，1999年，8・24頁。

³⁵ 同，77頁。

「癸未四月初七日 戊子 留大坂之第三日 遭都訓導崔天宗被刺殺死之變留二十九日 陰冷日慘噫 一房都訓導大丘崔天宗，晨告開門，還其房，和衣假寢 房在三房之下，一房軍官廳之障間 忽有一倭孺胸刺頸 驚起，刀尚左頸，自拔逐之 倭走出門，至厨間，踐厨宿格軍之足 格軍睡熟，雖驚而莫之省 天宗逐之及門，氣盡而止 天明天宗遂殞絕 其刀似鎗三稜短木柄，刻曰魚永 血漬刀淋漓 館中上下心寒莫究 其端，拿入三首譯，使之覈出彼人，言檢其傷痕，乃可覈犯 夜深後所謂目付與力來檢云 馬曾不為送訊，佯若不聞行中為之不肉，日供使之勿捧，盡收筆硯，斷棄接見酬應之事」

（癸未四月初七日 戊子 大坂に滞留した第3日目に、都訓導崔天宗が刺殺される変事に遭い、29日間留まった。日はひんやりとして、天気は陰鬱で冷え々えとしていた。……略…… 館にいる人々は余りにも心が苦しかったので、どのようなことが起ったのか理解することができなかった。3人の首譯が入ってきて、事実を調査し詳らかにすると言ったが、倭人たちが言うことは、「その傷口の発生した跡形を保存すれば、犯人を明らかにすることができる。夜が深くなった後に、所謂目付と與力が来て、検見するということだ」云々と言った。対馬藩主は人を送って状況を尋ねもせず、恰も聞かなかったようであった。その為に一行は、肉も食わず、日供を捧げることも禁止する。また筆と硯を全て収めて、倭人たちと接見して詩を酬應することを放棄した。

前節の②で、南玉が「義理を理由に応酬してあげることができなかった」と書いた「義理」とは、上記の下線を引いた箇所を意味する。

しかし、そのような政治的にも非常に緊迫した事件2日後（四月初九日）に、なぜ中西尚賢の詩は南玉の目にふれることができたのであろうか。

中西尚賢は長崎からの帰路、大坂の木村兼葭堂を訪ね、初対面ながら旧知の間柄のように、3日間酒を酌み交わしながら語り合ったという。その折、尚賢は兼葭堂に、通信使が江戸からの帰路再び大坂に戻った時、自らの詩とともに、詩文唱酬時の贈呈品である、乾祐直の『莊岳集』を通信使に渡すことを託したのではないかと考える。

南玉の返事である中西尚賢宛の書簡の中に、『燕臺風雅』に書かれていた『莊岳集』の称赞の言葉が記載されていたかは、不明である。

第三節 『日観記』による長谷川尚之の動向の考察

中西の弟子である長谷川尚之であるが、現在の処、『日観記』には、第一節①のみにしか名前を見出すことができなかった。『燕臺風雅』長谷川尚之の項³⁶には、長谷川と通信使に接触があったというようなことは書かれておらず、勿論朝鮮通信使についての記述は一切ない。

『日観記』において、長谷川が名前のみの記載であったことについては、以下のように考察した。

『日観記』を韓国語に翻訳した，남옥지음, 이해순감수, 김보경 옮김 『붓끝으로 부사산 바람을 가르다』 소명출판, 2006 (南玉著, 이해순監修, 김보경翻訳『筆の穂で富士山の風を分つ』 소명出版, 2006) は、冒頭の解説，3 『일간기』의 체재와 내용 (『日観記』の体裁と内容) のなかで、次の

³⁶ 富田前掲（脚注1），卷之六，16頁。

ように述べている。

이 중 특히 눈길은 끄는 것은 권 4 의 「창수제인」이다. 이는 여정에서 만나 창수한 일본인들 500 여 명의 이름을 빠짐없이 적어 놓은 것이다. 그 안에는 시를 창수한 사람뿐만 아니라 ‘단지 필담만 나눈 사람까지’ 포함되어 있으며, 이름, 자·호, 직위 또는 신분, 이전 통신사행에서 창화한 사실, 창수 또는 필담을 나눈 사람들 사이의 관계등이 모두 밝혀져있다.

(このなか(「春」)で特に目を引くのは、巻4の「唱酬諸人」である。これは旅程で会って唱酬した日本人たち 500 余名の名前を、落とすことなく記録しておいたことだ。その中には、詩を唱酬した人だけではなく、‘唯筆談だけ交わした人まで’含まれており、名前、字・号、職位または身分、以前通信使行で唱和した事実、唱酬または筆談を交わした人たちの間柄の関係などがすべて明らかにされている。) ³⁷

第一節の①でみたように、長谷川はこの「唱酬諸人」500 余名のなか、確かに名を連ねている。

松田甲『續日鮮史話』第二編「正徳期朝鮮通信使と加賀の學者」には、信使と筆談、唱和する冒頭、相互の自己紹介のために、名刺のような通刺というものが交わされていたことを、『正徳和韓唱和録』から紹介している。例えば、伊藤莘野が 1711 (正徳元) 年 9 月 15 日、大坂本願寺の賓館にて、通信使と初めて対面した時の通刺は、下記の通りである³⁸。

伊藤莘野	初接芝眉。至幸至幸。僕姓伊藤。名言。字思忠。號莘野。又號剡溪。假官名齋宮。本京師人。今家賀州。
李東郭	僕姓李。名磻。字重叔。號東郭。生甲午。乙卯進士。癸酉文科狀元。丁丑重試。曾任安陵太守。以製述官承命來到耳。
南泛叟	僕姓南。名聖重。字仲容。號泛叟。從事官書記來。

この伊藤のような通刺は、通信使自身が会った日本人の記録となっていたと思われる。

南玉に乾祐直の『莊岳集』と、中西尚賢の通刺と漢詩、詩文応酬依頼の書簡を渡そうとしたのは、中西の弟子であった長谷川尚之ではないかと考える。

中西は加賀にいて、大坂にきたのは長谷川 1 人であるならば、長谷川は自らの通刺を携え、師から預かってきたものを、兼葭堂に託したのではないかと考える。それらは、兼葭堂から南玉へ渡され、南玉からの返事は、同じ経由で、長谷川尚之に手渡されたのではないかと考察する。

そしてこの考察は、長谷川は通刺だけは渡しているので、前述した南玉が唱酬した日本人名の中に、「仲尚賢」(中西尚賢)とともに、「長川尚之」(長谷川尚之)の名前が、ここ 1 箇所のみに記載されていたのではないかと考えられるものである。

以上の『日観記』と『燕臺風雅』の記述から、中西尚賢と長谷川尚之 2 名の

³⁷ 남옥지음, 이혜순감수, 김보경 옮김 前掲(脚注 6), 10 頁。

³⁸ 松田甲『日鮮史話(四)續日鮮史話 第二編「正徳朝鮮信史と加賀の學者」』原書房, 1976 年, 55・107 頁。

加賀藩の儒者の動向に、木村兼葭堂が介在していたことが明らかとなった。

第四章 『日観記』による木村兼葭堂の動向の考察

次に、『日観記』から、南玉と木村兼葭堂の交流に於いて、加賀藩の儒者に関わる時日について考察する。

【往路】

①『日観記』「夏」巻六 十二月初九日（1763年 筆者注） 於藍島
「……略 龜井魯致書 多欲來見阻 之語、並致所著東遊詩文 乞題評
其所從遊者 所謂獨嘯菴 永富鳳 魯以為海東一人、僧大潮、木弘恭 皆在大阪……略」

（……略 龜井魯から書簡が送られてきた。訪れて会いたかったが、阻まれてしまったとのことである。自身の「東遊詩文」を送ってきて、題評を求めてきた。龜井に従遊した者は、獨嘯菴といわれる永富鳳である。龜井魯は海東の第一人者とされる。僧の大潮と木弘恭（木村兼葭堂） 2人とも大坂にいる。……略）

南玉は藍島に於いて、龜井魯から初めて木村兼葭堂の名を聞いた。

②『日観記』「秋」巻七 一月二十二日（1764年 筆者注） 於大坂
「……略 木弘恭、字世肅、號兼葭堂 開堂於浪華之上 蓄中國奇書 歲買千餘種 日會四方詩酒之徒以豪士名 即龜井魯所稱也……略」

（……略 木弘恭、字は世肅、兼葭堂と号する。浪華に堂を開き、中國の奇書を蓄え、毎年千余種を買い求めているという。日々四方から訪ねてくる詩と酒を好む人々と会し、豪快な文士として名が知られる。すなわち龜井魯が称えた人物である。……略）

南玉は、龜井が称赞していた兼葭堂と、この日初めて会う。

③『日観記』「秋」巻七 一月二十四日（1764年 筆者注） 於大坂
「……略 以龜井魯書與木世肅俾傳永富鳳 且問鳳文識。果名過其情不及合麗王之輩云 世肅與福尚脩頗工於印章 使於歸時刻一二以待之 ……略」

（……略 龜井魯の手紙を木世肅（兼葭堂）に与え、永富鳳に伝えさせた。且つ富鳳の文章と学識を尋ねた。予想どおり名前はその実情を越えていて、合麗王の輩にも及ばないと言う。世肅と福尚脩は印章に非常に秀でていた。そして彼らをして、我々が戻ってくる時に一、二個彫ってほしいと言った」……略）

兼葭堂は福尚脩とともに彼らが彫った印章を、南玉ら通信使が帰路大坂に着いた時に、贈呈することを約束した。すなわち、南玉等に再び会うチャンスがあるのがわかっていたのである。故に兼葭堂は、前述した長崎帰りの中西尚賢が彼を訪ねた時に中西から依頼されたものを、この信使帰坂時に、南玉に渡して上げられると考えたのではないだろうか。

【帰路】

④『日観記』「秋」巻八 四月初四日（1764年 筆者注）

「……略 過平方。又不下館 西餐亦於舟中 以昨日登樓之崇，脛足酸疼，頽臥柁屋 木弘恭福尚脩刻送印章 仍以我行中諸印為一印譜，合離為之序，可見其勤而有信 次池球舟中詩……略」

（……略 平方を過ぎた。また館所に下らなかった。夕食も舟の中でした。昨日樓台に登ったことで具合が悪くなり、脛と足が非常に痛くなって柁屋で、倒れて横たわっていた。木弘恭（兼葭堂）、福尚脩が印章を彫って送ってきた。仍て我々一行全員の印章を以て、ひとつの印譜を拵え、合離がその序文を書いたのだが、その勤勉さと信があるのがわかった。池球の「舟中詩」を次韻した。……略）

兼葭堂は福尚脩とともに、往路の大坂で約束した通りに通信使の印章を彫って、南玉らに送った。南玉は、合離の序文が書かれた信使全員の印譜を見て、その匠さと信の心に感銘を受けたことを綴っている。

前述のとおり、印譜とは『東華名公印譜』編刊一冊である。製述官南玉・正使書記成大中はじめ、写字官・医官等 15 名の氏名字号を刻し、跋を付して贈った。序は細合半齋（合離）³⁹である。

⑤『日観記』「秋」巻八 四月初五日（1764年 筆者注）

「……略 釋竺常號蕉中，西翼，奥田元繼，衢貞謙，木世肅，河子龍，合麗王，福尚脩，安井属玉，瀧恕，崖弘毅，鳥宗成，源文龍，膝邦，西田思明，伴尚治，西熙，釋水月，舘屯，菅繼明重見者半始見者半 各授詩属和 至夜分魯堂，仲達，周宏，遵，来話 竺常去時未見者，而非以名利持身者 世肅，麗王，或以其意氣之豪，或其詞翰之長 ……略」

（……略 釋竺常號は蕉中（大典 筆者注），西翼，奥田元繼，衢貞謙，木世肅，河子龍，合麗王，福尚脩，安井属玉，瀧恕，崖弘毅，鳥宗成，源文龍，膝邦，西田思明，伴尚治，西熙，釋水月，舘屯，菅繼明等再会する者が半分で、初めて会う者が半分だった。各々詩を取り出すので、応酬してあげた。

深夜、魯堂，仲達，周宏，遵が来て、話を分けた。竺常は往路では会うことがなかったのだが、名利を以て身を持する者ではなかった。世肅と麗王は、或は意気が豪傑で、或はその詞翰が飛びぬけていて、……略）

兼葭堂は釋竺常（大典）らとともに、南玉を訪ねる。南玉は、大典と初めて会ったのだが、名利を以て身を持する者ではないと見抜く。また兼葭堂についても、豪気な人物であると、好感を持って迎えている様子がわかる。前日に兼葭堂と福尚脩が贈った印章や印譜で、兼葭堂への心からの信頼も、より一層深くしたのであろう。

⑥『日観記』「冬」巻九 四月初七日（1764年 筆者注）（前述）

³⁹ 細合半齋：細合斗南（合離）名は離のち方明，字は麗玉，通称八郎右衛門。斗南，学半齋，太乙真人と号する。京都の人。大坂に住む。書を能くした。1803（享和3年）歿。享年 77。著書は『山経二義』『孝経闡旨』『論語啓発』『詩説統』『周易説統』その他多数（杉村頭道編『儒海——儒者名鑑』大久保書院，1975年，139頁）。

未明に、崔天宗被殺事件が起こる。

⑦『日観記』「冬」巻九 四月初九日（1764年 筆者注）（前述）

第一節で先述の如く、南玉は加賀州の仲尚賢と備中州の僧徳雲の詩を見たのだが、遠路はるばる訪ねてきてくれたということがわかって、義理を理由に応酬してあげることができなかったと記している。

⑧『日観記』「冬」巻九 四月十五日（1764年 筆者注）（前述）

同じく第一節で先述の如く、南玉は、合離、木村兼葭堂、仲尚賢、源文虎の書簡に返事を送っている。

以上、南玉と兼葭堂の交流に於いて、中西に関わる時日のみについて検証した。

兼葭堂側の先行研究⁴⁰からは、中西が兼葭堂の自宅を訪問したことや、南玉への便宜を図ったことについて裏付けるものは、現在のところ筆者は管見できなかった。しかし、『燕臺風雅』と『日観記』によって、中西と兼葭堂2人の交流は確かにあったと考えられる。

むすび

以上、考察してきた中西尚賢・木村兼葭堂・南玉の三人の一連の動向を、時系列で下記のようにまとめた。

①加賀藩年寄・村井又兵衛の儒者中西尚賢は、大坂で明和度朝鮮通信使と詩文唱酬をするために、1763（宝暦13）年11月に金澤を出発した。使節団は12月3日に筑前藍島に着いたのだが、副使船が破損しその修理のため、大坂到着は翌年に延引された。中西は大坂で通信使一行を待ち続けていたが、旅費の工面が付かなくなって、年明けに金澤へ帰ってきてしまう。【『泰雲公御年譜』】

②1764（明和元）年1月24日、往路の大坂で兼葭堂は福尚脩とともに、南玉らに印章を彫って、帰路の大坂で渡すことを約束する。【『日観記』】

③1764（明和元）年、通信使が来聘したと聴き、中西は無我夢中で独り千里の道を歩き、長崎へ行く。その帰路浪華で兼葭堂宅を訪ねる。2人は初対面であったが、意気投合し三日三晩酒を酌み交わし、交流した。【『燕臺風雅』】

④1764（明和元）年4月4日、帰路大坂においての舟中に、往路で約束したとおり兼葭堂と福尚脩は、南玉らに印章と印譜を送ってきた。【『日観記』】

⁴⁰ 木村兼葭堂著、曉鐘成編、松川半山画『兼葭堂雜録5巻』前川善兵衛、1800年；水田紀久『近世浪華学藝史談』中尾松泉堂書店、1986年；中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』新潮社、2000年；水田紀久『水の中央に在り 木村兼葭堂研究』新潮社、2002年；水田紀久・野口隆・有坂道子編著『完本 兼葭堂日記』藝華書院、2009年；金文京『萍遇録』と「兼葭堂雅集圖」——十八世紀末日朝交流の一側面『東方學』第百二十四輯、財団法人東方學會、2012年；有坂道子「木村兼葭堂の交際圏——『兼葭堂日記』に見える武士に着目して（一）」『京都橘大学研究紀要』40号、2013年；鄭敬珍「一七六四年の朝鮮通信使からみる庶孽文人——「兼葭雅集図」制作の過程と大坂文人たちとの交遊」『日本研究』No. 52、2016年。

- ⑤1764（明和元）年 4 月 5 日、兼葭堂は大典を伴い、南玉を訪ね、紹介する。【『日観記』】
- ⑥1764（明和元）年 4 月 7 日、崔天宗殺人事件が起こる。【『日観記』】
- ⑦1764（明和元）年 4 月 9 日、南玉、兼葭堂らの手紙を読み、兼葭堂や中西らの詩文を見た。詩文は義理を理由に応酬しなかった。【『日観記』】
- ⑧1764（明和元）年 4 月 15 日、南玉は、兼葭堂や中西らの書簡に、返事を書いた。【『日観記』】

上記の考察結果により、明和度使行において、加賀藩に朝鮮通信使との詩文唱和集が遺されていない理由が解明された。中西尚賢は、使節団の海難事故等のスケジュールの延引や、殺害事件のために不運が重なり、遂に南玉らと相まみえ、熱望していた詩文唱酬の夢を叶えることはできなかった。無念の極みであったのではないだろうか。殺害事件を語らねばならないことへの憚りと、深い痛恨で、自ら口を閉ざしてしまったのであろうか。中西自身がこの顛末について記したものは遺っていない。中西は明和度使行の 4 年後に生涯を終えた。

弟子の長谷川尚之は、加賀藩年寄・村井又兵衛の教授となったのち、招聘され藩校の「明倫堂」⁴¹で後進の指導にあたり、1812（文化 9）年 79 歳で歿した。長谷川も、明和度使行について記したものは遺していない。この一件以外にも、中西と長谷川が書き記したものを、現況筆者は管見することができなかった。

木村兼葭堂と加賀藩の儒者との交流は、兼葭堂の新しい人脈の発見でもある。突然の怪しい初見の客であったが、一詩を賦したことにより、儒者であることを見抜き、多忙で在りながら、快く迎え入れ便宜を図る。兼葭堂の懐の深さに、真の文人の姿が改めて浮き彫りとなってくる。当時の文人社会の自由往来、闊達さが彷彿とし、さらに朝鮮通信使来聘に伴い、日本の文人同士間の情報交換も活発であったことが窺える。南玉と中西の書簡のやりとりは、事件直後という状況を鑑みると、より一層兼葭堂の仲介の労がなければ、決して実現できなかったであろうと思われる⁴²。

⁴¹ 明倫堂：寛政から明治に至るまで継続した加賀藩の学校は、文学学校を明倫堂、武学校を経武館と言った。学校創立の志は前田綱紀から始まるが、第 11 代藩主前田治脩によって成就し設立された。1792（寛政 4）年 3 月に開校し、京都から招聘された新井白蛾が学頭を命じられ、助教に長谷川準左衛門（尚之）が就いた。5 月に白蛾が病死したため、長谷川が都講（学頭）となり、7 月から授業が開始された。皇学・歌学・天文学・算学・易学・医学・礼法の教師を置いた。その後、何度か諸制改革を行いながら、明治に至った。（日置前掲（脚注 10）、187 頁）。

⁴² 凶變後、兼葭堂は客館に入れなくなったため、文書等の送り届けについて、若干の考察を下記のように行った。大典『萍遇録』に「七日與子玄詣館，属有凶變，禁不得入，余淹在世肅家一日宏公来語曰，紫衣門下人得往來館中，……略」（4 月 7 日，大典は子玄とともに客館を訪ねるが，凶變が起こったため入館を禁じられる。大典が兼葭堂宅に滞在していると，宏公（周宏ではないか—筆者注）が来て語るには，僧侶だけは客館の中に入ることが出来るという。……略）。凶變後，兼葭堂は客館に入ることができなくなってしまった。物理的な問題ではあるが，兼葭堂に託された中西の詩文や手紙は，誰によって南玉へ手渡され，南玉から返信を受け取ったのであろうか。杉村（2008）は，加番接伴僧であった相國寺の維天長老の徒僧周宏が，庶務的な役割を果たしていた旨を述べている。『日観記』四月初九日の条には，「……略 周宏，木世肅，合離，有書致加賀州仲尚賢，備中州僧德雲，詩以為千里來，待乞得一言之和……略」とあるので，周

『日観記』「冬」巻九 四月十五日（1764年 筆者注）の項
「十五日 丙甲 ……略 雖當事故隔阻之時、無一字相報而去、殊非水陸數千里伴行、酬唱之意、良可駿也 荅合離、木世肅、仲尚賢、源文虎書簡…
……略」
(十五日 丙甲 ……略 たとえ事故が時を阻み隔て、一字無く相応え去ると雖も、水陸數千里の伴行を断つのではない。唱酬のころは、(それよりも)勝り優れている。合離、木世肅、仲尚賢、源文虎の書簡に答える。……略)

南玉は、詩文唱酬を望んだ日本の文人たちの真意を汲んで、「たとえ事故が時を阻み隔て、唱酬の一字も無く去るとしても、水陸數千里を伴に行くことを断つことではない。唱酬の志は勝り、優れているというべきである」合離、木世肅、仲尚賢、源文虎の書簡に答えた。

傍線の箇所は、南玉のつぶやきであったかもしれないし、兼葭堂や中西に送った書簡の中に書かれた言葉であったかもしれない。殺害事件が起こった直後であり、まだ犯人も捕獲されていないなか、南玉は日本人に対して、想像を絶する怒り、怨み、不信感を抱いていたであろう。また両国間の外交問題にも発展しかねない、政治的にも緊迫した状況の中でもあった。しかし、南玉は「義理」で唱酬することはしなかったが、はるばる遠来から心を寄せてくれた日本の文人たちに対しては、その切実な想いを汲み、真心をもって対応してくれたのであった。唱酬は、形として残すことはできずに去ることになるが、唱酬しようとする高い志はその形よりも勝り、優れている。水陸幾千里ともにころは結ばれているのだと答えてくれたのであった。

この南玉の言葉は、250 年余、時を隔てた今も、国と国との文化の交流は、政治を越えた力をもつものであるとして、我々の心に響いてくる。

中西尚賢・木村兼葭堂・南玉が遺したこの裏面史の一齣は、史上最も民際交流が盛行であったといわれる明和度使行の文化交流が、いかに奥深く、豊かであったかを、我々にさらに伝えるものである。

宏が、南玉へ兼葭堂の手紙や中西から託されたもの等を届けたのではないかと考えられる。『日観記』四月十五日の条には、周宏の名は見られないが、「新酊菴瑛長老送其徒通節心縁問慰問芳長老已西歸平安城……略」とあり、以酊菴長老龍芳から交代した、以酊菴長老守瑛の徒僧、通節と心縁が、慰問方々挨拶に来た。その折、徒僧二人は、南玉から兼葭堂や中西らへの返事を受け取ったのではないかと考えられる。通節と心縁の名は、『日観記』春 巻四の唱酬諸人只筆語者亦附に、以酊菴長老守瑛の徒僧として記載されている。僧侶である大典に、兼葭堂が依頼した可能性もあるが、『萍遇録』にも『日観記』にも、大典が四月九日と十五日に、南玉と会った形跡は見られないので、考えられない。以上、事件後の物理的な手渡し役ではあるが、その任を負ったのは、長老たちの徒僧たちであったと考える。

資料 1

明和度筆談唱和集一覧

李元植『朝鮮通信使の研究』(1997)によると、明和度の筆談唱和集は 54 冊現存しており、現存している全次の筆談唱和集のなかでは最も多い。以下は筆者が、明和度唱和集の総目録(李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、1997 年、355, 357, 360, 660-664 頁から引用)をもとに、日本の儒者文人の名前の後に、藩名、或は居住地或、出身地を()で付与し、それらが判明していない者は□で囲んで作成したものである(杉村頭道編『儒海——儒者名鑑』大久保書院、1975 年; 齋藤恵太郎『近世儒林編年誌』全国書房、1943 年; 富田景周編輯『燕臺風雅』勸文堂、1915 年参照)。

検証の結果、以下 54 冊の中に、加賀藩儒者の氏名を見出すことはできなかった。

《 明和度唱和集総目録 》

- ①傾蓋集 明和度信使製述官南玉、書記成大中、元重挙、金仁謙らとの応酬詩文を集め、渋井太室(佐倉藩)、木下蓬萊(勝山藩)、関松窓(江戸の人)の序を付す、韓使四人の肖像を挿入 沢田東江源麟(江戸の人)自筆稿本 一冊(中野三敏氏蔵)
- ②槎客萍水集 市浦直春(南竹)(備前の人)等と韓使との唱酬詩 宝暦十四年 十五卷 写本二冊(東京都立中央図書館蔵)
- ③殊服同調集 林文翼(尾張藩)編 刊本一冊(東京都立中央図書館蔵)
- ④問佩集 大江資衡(玄圃)(京都の人)編 写本一冊(東京都立中央図書館蔵)
- ⑤問槎余響 宝暦十四年正月二十五日大坂客館における石川貞(河内の人)、谷顯中(伊勢州朝明人)、田立松、伊藤冠峯(伊勢の人)らと韓使南玉、成大中、元重挙、金仁謙との筆談唱和集 伊藤維典編 明和元年刊 二冊(韓国国立中央図書館蔵)
- ⑥長門癸甲問槎 滝長愷(号鶴台)(山口藩)、草場大麓、山根南溟(萩藩)秦嵩山らと韓使との献酬詩語を編輯したもの 宝暦十四年 四卷 刊本(李元植氏蔵)
- ⑦東渡筆談 宝暦十四年 釈因静 刊本一冊(東京都立中央図書館蔵)
- ⑧両好余話 奥田元継(姫路の人)と韓使との筆談唱和 二卷附録一卷附衢貞謙二冊(東京都立中央図書館蔵)
- ⑨桑韓筆語 附倭韓医談 写本一冊(東京都立中央図書館蔵)
- ⑩桑韓筆語 山田宗俊(正珍)(幕府医官)と朝鮮李佐国との筆語 山田正彦編 宝暦十四年 明和八年刊(東京都立中央図書館蔵)
- ⑪講余独覧 南宮岳(信濃の人)と朝鮮製述官南玉らとの唱和詩 明和元年刊 一冊(李元植氏蔵)
- ⑫朝鮮使節南秋月等対北山橘庵(河内の人)筆語 鶏壇嚶鳴と合一冊手稿本(大阪府立中之島図書館蔵)
- ⑬朝鮮聘使館浪華記沙義端記附録記浪華木世肅(大坂の人)寄呈朝鮮南時韞学士二律 刊本(大阪府立中之島図書館蔵)
- ⑭問朝鮮国秋月南書記 滝弥八(山口藩) 写本(宮内庁書遼陵部蔵『片玉集』七八所収)
- ⑮萍遇録 明和度亀井魯(福岡藩)、滝弥八(山口藩)、井潜(越後の人)、福尚脩(大坂の人)、

合離（京都の人）、木世肅（大坂の人）と韓使との筆談唱酬 写本一冊（韓国国立中央図書館蔵）

①⑥東槎唱酬集 日本文人源之熙（阿波国）、君山（名古屋藩）、谷顯仲（伊勢州朝明県人）、新川（名古屋藩）、**嶋村皓**、**亀井魯**（福岡藩）ら二十六人が成大中に上程した詩稿 二軸（韓国国立中央図書館蔵）。他に名を列ねているのは、日東僧醉月隆賢、丹波国北文彪、**兜父舞扨**、京師余璫伯玉、**高田次正**、**平安井命登**、尾州山三秀、**小鹿鸞岡**、**召南**、**竹溪**、**春坡**、**蘭州**、**白石榮**、**子春**、**沔陽散人吉野徳義**、**壹岐函崎選悉齋古野連尋**、**泊維章叔慶**、**井魯垌**、**秋江**、**築州写字官横田義民**、筑前城逸

①⑦小雲棲稿 信使との唱酬詩文収録 大典撰卷一二所収 刊本（大阪府立中之島図書館蔵）

①⑧名賢往来 **正徳度・明和度、韓使との筆談唱酬** 写本（大阪府立中之島図書館蔵）

①⑨奉呈詩文 明和度成大中に上呈詩文、日本文士**草場安世**ほか五四人（山口女子桜圃寺内文庫蔵）の詩の原箋一三〇枚が所蔵されている。

その内容はつぎのとおりである。

奉呈詩文

●**中村弘道**、**林信有**（鳳池）（幕府儒官）、**谷孚先**（伊勢州朝明県人）、**松村翠**（山城）、**林信愛**（幕府儒官） 10枚

●**林信愛**（幕府儒官）、**林信有**（幕府儒官）、**僧了然**、**林東庵**、**山室当則** 10枚

●**林信愛**（幕府儒官）、**横田玄節**、**南川維遷**（伊勢の人） 10枚

●**草場安世**、**万年山維天**（京都相国寺住職加番僧）、**石川貞**（河内の人）、**林東庵** 10枚

●**林東庵**、**小室東則**、**糟尾恵迪**、**青葉養洗**（紫峰） 12枚

●**矢木愷**、**近藤篤**（岡山藩）、**源敏**、**岩信成** 9枚

●**矢田英源**、**桜井広**、**文淵蔵** 10枚

●**山口純実**、**野口芳峻**、**横田玄節**、**岡延龍** 11枚

●**河野通遠**、**林成**、**芥澄子泉**（京都の人） 8枚

●**大江資衡**（京都の人）、**釈円巖**（京都の人）、**田中秩**（伊勢の人）、**岡田国香**（大垣の人）、**勝山田立成**、**南禅寺苾芻** 13枚

●**石川貞**（金谷）（河内の人）、**谷孚先**（伊勢州朝明県人）、**中島鳴鶴**、**田中正誼**、**藤玄芝** 10枚

●**河口俊彦**、**片岡有庸**（氷川）、**河口大岳**、**松本為美** 5枚

●**青葉養浩**、**林信有**（幕府儒官）、**徳力良弼**（幕府儒官）、**松田久徴**（江戸の人）、**木部敦**（郡山藩） 5枚

●**徳力良弼**（幕府儒官）、**木部敦**（郡山藩）、**片岡有庸**、**河口大岳**、**松田久徴**（鴻溝）（江戸の人） 6枚

●**鈴世憲**、**久保奏亨**（一橋公儒臣）、**松本為美** 5枚

●**芥元際**、**魯斎**、**横田準** 4枚

●**西林直**、**源君績**、**独明** 6枚

●**土田貞仍**（幕府儒官）、**林観亭**、**維天**（京都相国寺住職加番僧） 5枚

②⑩栗斎探勝草 附韓客唱和 大坂の与力内山栗斎と韓使との唱和集 刊本二冊（東京都立中央図書館蔵）

- 21 英軒野稿 **宮下英軒** (名は肅 亀井南溟^(福岡藩)の門人) 撰, 「奉送亀長公遊藍島序」を載す, 明和度韓使との応酬 写本 (東京都立中央図書館蔵)
- 22 韓客人相筆話 明和度信使の大坂客館における人相鑑定記, 卷末に正使趙曦をはじめ副使, 従事官, 書記, 軍官らの肖像を載す 新山退甫道人著 明和甲申秋八月 天橋窟蔵版 刊本一冊 (東京韓国研究院蔵)
- 23 日本文人上呈詩文 明和度書記成大中に上呈した日本文士の詩稿 肉筆詩稿三卷 (李元植氏蔵)
- 24 泱泱余響 亀井南溟^(福岡藩)が明和度 (一七六四) の朝鮮信使製述官南玉, 三書記成大中・元重挙・金仁謙らとの筆語唱和集 (亀井南溟^(福岡藩)) (亀井昭陽^(福岡藩)) 全集第一卷所収)
- 25 鴻臚館和韓詩文稿 遠州刺史加藤侯記 **室藤資哲 (号惶斎)** と韓使との筆談唱和 写本一冊 (中野三敏氏蔵)
- 26 甲申朝鮮諸人筆語 朝鮮使筆談集 元重挙らの自筆 卷物三卷 三九・五×八三〇・〇センチ (安井澄彦氏蔵)
- 27 東槎余談 劉維翰^(紀伊の人) 著 二卷 (東北大学附属図書館狩野文庫蔵)
- 28 韓館応酬録 江戸儒生石金子誼^(陸前の人), 熊阪台洲^(奥州伊達郡の人)と南玉, 玄川, 退石, 龍淵, 良医李佐国らとの筆談唱和 (福島県立図書館蔵)
- 29 三世唱和 名古屋性高院において, 松平君山^(名古屋藩), 息子霍山, 孫南山を連れて韓使と筆談唱和 刊本一冊 (国立国会図書館蔵)
- 30 歌芝照乘 韓使と渋井太室^(佐倉藩), 四明井潜^(越後の人)との筆談唱和 写本一冊 (内閣文庫蔵)
- 31 品川一灯 太室^(佐倉藩)・蓬萊^(勝山藩)・崑山^(佐倉藩)と韓使との筆談, 中井積善^(竜野の人)の跋がついている 写本 (内閣文庫蔵)
- 32 松庵筆語 写本今井敏卿 (号松庵)^(江戸の人)が江戸客館において南玉・成大中・元重挙・金仁謙・李彦瑱・医員南斗旻, 吳大齡と筆談 写本一冊 (内閣文庫蔵)
- 33 鴻臚撫華 西尾藩典翰源文虎と南玉・成大中・元重挙・写字官洪聖源・画員金有声・良医李佐国との筆談唱和 (西尾市立図書館蔵)
- 34 韓館唱和 大学頭林信言と韓使との筆談唱和 写本三卷三冊 (内閣文庫蔵)
- 35 韓館唱和続集 儒官林信有ほか**日本文人二十八人**と三使書記との筆談唱和 写本一卷 一冊 (内閣文庫蔵)
- 36 韓館唱和別集 信使伴人洪聖輔と渋井平^(佐倉の人)・今井兼規^(佐倉藩)・関修齡^(川越の人)ら**二四人**との筆語唱和写本三卷三冊 (内閣文庫蔵)
- 37 蓬高詩集 綾部藩儒医西川国華と信使との唱和, 贈成大中詩が収められている 三卷 附録一卷 文化十一年刊
- 38 賓館唱和集 **平俊卿軒** 刊本一冊 (京都大学附属図書館)
- 39 河梁雅契 磯谷滄洲^(名古屋藩)等 二卷一冊刊本 (国立国会図書館蔵)
- 40 桑韓筆語 山田図南^(幕府医官) 一冊刊本 (国立国会図書館蔵)
- 41 東遊篇 那波魯堂^(徳島藩)編 二卷二冊刊本 (国立国会図書館蔵)
- 42 表海英華 岡田新川^(名古屋藩)編 一冊刊本 (国立国会図書館蔵)
- 43 客館唱和 久保忠斎^(讃岐高松の人) 一冊写本 (国立国会図書館蔵)
- 44 観風互詠 **山口西周等** 二卷二冊刊本 (中野三敏氏蔵)
- 45 牛渚唱和集 井上四明^(越後の人) 二卷一冊写本 (中野三敏氏蔵)
- 46 和韓双鳴集 大江玄圃^(京都の人)等 六卷五冊 (九州大学附属図書館蔵)

- 47 縞紵集 **菅時憲** 二卷一冊写本（九州大学文学部蔵）
48 両東關語 **松本興長** 二卷二冊刊本（内閣文庫蔵）
49 和韓医談 田村西湖編 一冊刊本（内閣文庫蔵）
50 和韓医話 山口忠居 二卷一冊刊本（内閣文庫蔵）
51 藍島唱和集 **櫛田菊潭** 一冊写本（櫛田正己氏蔵）
52 韓人唱和 松平君山（名古屋藩） 二冊写本（蓬左文庫蔵）
53 傾蓋唱和録 辺瑛（渡辺瑛 出身地不明だが当時十五歳） 一冊写本（国立国会図書館蔵）
54 甲申韓客贈答 土田貞仍（幕府儒官） 一冊写本（祐徳神社蔵）

以上

〔参考史料〕

李彦瑱『松穆館燼餘稿』写本，1764年，大阪府立中之島図書館蔵。
元重挙『和国志』写本，1764年，一般財団法人石川武美記念図書館蔵。
金仁謙著，高島淑郎訳注『日東壯遊歌——ハングルでつづる朝鮮通信使の記録』平凡社，1999年。
木村兼葭堂著，暁鐘成編，松川半山画『兼葭堂雑録5巻』前川善兵衛，1800年。
侯爵前田家編集部『加賀藩史料 第八編 自寶暦八年至安永参年』1935年。
黒坂勝美・國史体系編修會編輯『第四十七巻 徳川實紀 第十篇』吉川弘文館，1991年。
申維翰著，姜在彦訳注『海游録——朝鮮通信使の日本紀行』平凡社，1976年。
津田政隣著，高木喜美子校訂・編集『政隣記 宝暦十一——安永七年 記録拾壺』桂書房，2015年。
大典『萍遇録』（金澤本・国会図書館本・静嘉堂本・内閣文庫本），1764年。
趙巖『海槎日記』，1763-1764年，韓国国立中央図書館蔵。
趙巖著，若松實訳『海槎日記 江戸時代第十一次（宝暦・明和） 朝鮮通信使の記録 書契・筵話編』日朝協会愛知県連合会，1999年。
富田景周編輯『燕臺風雅』勸文堂，1915年。
南玉『日観記』写本，1764年，韓国国史編纂委員会蔵。
長谷川準也『先祖由緒并一類附帳』，1874年，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
林煌等編『通航一覽』第一～第三，国書刊行会，1912年。
原念齋著，源了圓他訳注『先哲叢談』平凡社，1994年。
森田良郷編『泰雲公御年譜 宝暦十三年 明和元年二年 六』，1852年，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。

〔参考文献〕

荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会，1988年。
有坂道子「木村兼葭堂の交際圏——『兼葭堂日記』に見える武士に着目して（一）」『京都橘大学研究紀要』40号，2013年。

李元植・大畑篤四郎・辛基秀他『朝鮮通信使と日本人——江戸時代の日本と朝鮮』学生社，1992年。

李元植「朝鮮通信使の訪日と筆談唱和」『韓』通巻 第110号，1988年。

李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版，1997年。

李太平『李王朝六百年史』洋々社，1968年。

石川県『石川縣史 第貳編』石川図書館協会，1974年。

石川県『石川縣史 第參編』石川図書館協会，1974年。

石川県姓氏歴史人物大辞典編纂委員会編著『石川県姓氏歴史人物大辞典』（角川日本姓氏歴史人物大辞典 17）角川書店，1998年。

池内敏『「唐人殺し」の世界 近世民衆の朝鮮認識』臨川書店，1999年。

磯田道史『武士の家計簿 「加賀藩御算用者の幕末維新」』新潮社，2019年。

上田正昭『朝鮮通信使 善隣と友好のみのり』明石書店，1995年。

上田正昭・辛基秀・仲尾宏『朝鮮通信使とその時代』明石書店，2001年。

大石慎三郎『田沼意次の時代』岩波書店，1998年。

大河良一『加能俳諧史』清文堂出版，1974年。

大庭卓也「朝鮮通信使とその文学史的意義」『江戸文学』32，2005年。

加藤周一『日本文学史序説下』筑摩書房，1980年。

姜在彦「室町・江戸時代の善隣関係」『季刊三千里』37号，1984年。

姜在彦『朝鮮儒教の二千年』朝日新聞社，2001年。

衣笠安喜『近世日本の儒教と文化』思文閣出版，1990年。

김보경「남옥（南玉）의 『일관기（日觀記）』 연구：대상・보기・쓰기문제를축으로」한국고전연구 14 집/한국고전연구학회/2006/（김보경「南玉の『日觀記』研究：対象・見ること・書くこと問題を軸として」『韓国古典研究』14集，韓国古典研究学会，2006）。

金文京『『萍遇録』と「兼葭堂雅集圖」——十八世紀末日朝交流の一側面』『東方學』第124輯，2012年。

権純哲「韓国思想史における「実学」の植民地近代性——韓国思想史再考Ⅰ」『日本アジア研究』第2号，埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要，2005年。

権純哲「松田甲の「日鮮」文化交流史研究」『埼玉大学紀要（教養学部）』第44巻第1号，2008年。

小西洋子「別宗祖縁と前田綱紀」『石川県立歴史博物館紀要』第19号，2007年。

伍躍「宝暦，明和年間の朝鮮通信使——十八世紀後期朝鮮士太夫の世界観」『東アジア研究』第21号，1998年。

齋藤恵太郎『近世儒林編年志』全國書房，1943年。

澤井啓一「儒教共栄圏の幻影——十八世紀東アジアの＜ジャポニスム＞」『北東アジア研究』別冊第4号，2018年。

辛基秀・仲尾宏『善隣と友好の記録 大系朝鮮通信使——第七巻 甲申・宝暦

度』明石書店，1994 年。

辛基秀『朝鮮通信使 人の往来，文化の交流』明石書店，1999 年。

時代別日本文学史事典編集委員会『時代別日本文学史事典近世編』東京堂出版，1997 年。

鄭敬珍「一七六四年の朝鮮通信使からみる庶掣文人——「兼葭雅集図」制作の過程と大坂文人たちとの交遊」『日本研究』no. 52，2016 年。

鄭英實「朝鮮後期知識人と新井白石像の形成——使行録を中心に」『東アジア文化交渉研究』4，2011 年。

杉村邦彦「多胡碑の朝鮮への流伝に関する新資料」『書学書道史研究』18，2008 年。

杉村顕道編『儒海——儒者名鑑』大久保書院，1975 年。

鈴木由紀子『開国前夜 田沼時代の輝き』新潮社，2010 年。

田川捷一編著『加越能 近世史研究必携』北國新聞社，1995 年。

田代和生『書き替えられた国書——徳川・朝鮮外交の舞台裏』中央公論社，1983 年。

田代和生『倭館——鎖国時代の日本人町』文藝春秋，2002 年。

田代和生『日朝交易と対馬藩』創文社，2007 年。

田中健夫『対外関係と文化交流』思文閣出版，1982 年。

高澤裕一・河村好光・東四柳史明他『県史 17 石川県の歴史』山川出版社，2000 年。

高澤裕一『加賀藩の社会と政治』吉川弘文館，2017 年。

高橋博巳「十八世紀東アジアを行き交う詩と絵画」『蒼海に交される詩文』（東アジア海域叢書 13）汲古書院，2012 年。

武田江里子「朝鮮通信使が遺した文化交流」『異文化コミュニケーション研究』第 1 号，1998 年。

辻善之助『田沼時代』岩波書店，1982 年。

徳田寿秋「朝鮮使節と御用馬調達と行列について」『石川郷土史学会々誌』第 38 号，2005 年。

仲三枝子「明和度朝鮮通信使が果たした文化交流についての一考察」慶應義塾大学卒業論文，2015 年。

中井信彦『転換期幕藩制の研究——宝暦・天明期の経済政策と商品流通』塙書房，1971 年。

中井信彦『町人』（日本の社会集団 5）小学館，1990 年。

仲尾宏『朝鮮通信使と江戸時代の三都』明石書店，1993 年。

仲尾宏『朝鮮通信使と徳川幕府』明石書店，1997 年。

仲尾宏『朝鮮通信使と壬辰倭乱——日朝関係史論』明石書店，2000 年。

仲尾宏他「朝鮮通信使関係資料目録」『青丘学術論集』第 21 集，2002 年。

仲尾宏『朝鮮通信使——江戸日本の誠信外交』岩波書店，2007 年。

中野三敏編『文学と美術の成熟』（日本の近世 12）中央公論社，1993 年。

中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』新潮社，2000 年。

남옥지음, 이해순감수, 김보경 옮김『붓끝으로 부사산 바람을가르다』
소명출판 2006（南玉著，이해순監修，김보경翻譯『筆の穂で富士山の風を
分つ』소명出版，2006）。

長森美信「天理大学附属天理図書館所蔵『東槎錄』について——金仁謙『日東
壯遊歌』との関連から」『前近代における東アジア三国の文化交流と表象——
朝鮮通信使と燕行使を中心に』29 卷，2011 年。

河宇鳳「一八世紀実学者の日本観——李瀾の日本観について」『青丘学術論集』
第 1 集，1991 年。

尾藤正英『江戸時代とはなにか 日本史上の近世と近代』岩波書店，1992 年。

夫馬進『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』名古屋大学出版会，2016 年。

藤田覚『日本近世の歴史 4 田沼時代』吉川弘文館，2012 年。

日置謙編『改訂増補 加能郷土辞彙』北國新聞社，1983 年。

백옥경「譯官吳大齡의日本意識——『溟槎錄』을중심으로」『朝鮮時代史
學報』Vo1.38, No.-, [2006] [KCI 등재]（백옥경「譯官 吳大齡の日本
意識——『溟槎錄』を中心として」朝鮮時代史學報，Vo1.38, No.-,
[2006] [KCI 登載]）。

真山武志「重教時代の世相」『石川郷土史学会々誌』第 40 号，2007 年。

松田甲『日鮮史話』全 6 編，朝鮮総督府，1926-1930 年。

松田甲『續日鮮史話』全 3 編，朝鮮総督府，1931 年。

松田甲『日鮮史話』第 1 - 4 卷，ユーラシア叢書 22 - 25，原書房，1976 年。

三宅英利『近世日朝関係史の研究』文献出版，1986 年。

三宅英利『近世の日本と朝鮮』講談社，2006 年。

水田紀久『近世浪華学藝史談』中尾松泉堂書店，1986 年。

水田紀久『水の中央に在り 木村兼葭堂研究』岩波書店，2002 年。

水田紀久・野口隆・有坂道子編著『木村兼葭堂全集 別巻 完本 兼葭堂日記』
藝華書院，2009 年。

宮元健次『加賀百万石と江戸芸術 前田家の国際交流』人文書院，2002 年。

横山恭子「近世中期朝鮮通信使の乗馬調達」『朝鮮学報』第 213 輯，2009 年。

横山恭子「朝鮮通信使迎送体制の研究」慶應義塾大学博士論文，2015 年。

吉田伸之『成熟する江戸』（日本の歴史第 17 卷）講談社，2002 年。

A Study on the Cultural Exchange between a Korean King's Delegation and Japanese Men of Culture in the MEIWA Era

Mieko NAKA

The main subject of this thesis is the cultural exchange between a Korean King's Delegation to the Japan's central government of Shogun in the MEIWA era (1764) and Japanese men of culture who attended the delegation.

The study intends to trace back the counter actions of NAKANISHI Naokata, a Kaga local government's Confucianist, and to dig up buried history of cultural communication between Nam-Ok, Korean seijutukan, and two other Japanese, NAKANISHI Naokata and Kimura KENKADO, one of the greatest cultural patrons in Osaka.

At the same time, this study will strength the historical research of, not only the cultural exchange between the Korean Delegation in the MEIWA era and Kaga local government, but also Kimura KENKADO's wide-ranged activities of patronage.

The study is based on analysis of mainly three records, namely, "Il-kwan-ki" (Nam-Ok, Korean seijutukan of the Korean King's Delegation to Japan's central government of Shogun in the MEIWA era), and two historical records of Kaga local government, that is to say "ENTAIHUGA" (TOMITA Kagechika), and "TAIUNKO'S PERSONAL HISTORY" (MORITA Yoshisato)".

Kaga local government did not compile any records of the poetic communication between Korean Delegation and Japanese correspondents. However, this study has now made clear that the three men of culture, Nam-Ok, NAKANISHI and KENKADO had communicated and exchanged their views of culture among them with deep insights.

Farther more, it has been made clear that the Korean Delegation in the MEIWA era had produced the most active and deepest cultural exchange, and at the same time, travelled Japan facing a lot of and huge troubles, that is to say, shipwreck and murder.

Besides the Korea-Japan communication, the mutual contacts between NAKANISHI and KENKADO have shown us that free and active communications on the Korean Delegation were, in those days, prevailed among Japanese men of culture.

Finally, Nam-Ok's sincere friendship and trust toward NAKANISHI and KENKADO recorded in "Il-kwan-ki" is, without question, a basis of international mutual understanding and cooperation and shows us living in REIWA era what the real international friendship is.

Key words: Nam-Ok , NAKANISHI Naokata, Kimura KENKADO